

(2) A：本、買ってきた？

B：C先生の本、かなり高くてお金が足りなかった。

まず「C先生の本」だけみても、C先生が書いた本、C先生が訳した本、C先生が持っていた本、C先生が薦めた本等、さまざまな解釈が可能であることが分かる。また、「高くて」という表現についても、「値段が高い」のように何が高いのかという点も明らかにしなくては「高い」の意味を確定することはできない。さらに「足りなかった」についても、「C先生が書いた本を買うのにはお金が足りなかった（買うのに十分なお金がなかった）」などのように、何に対して足りないのかという内容も明らかにしないとBの伝えている意味を理解することはできない。以上のように、コードモデルに基づいて求められる文の意味には、意味的に不確定な要素が多分に含まれているということが分かる。

また、話し手が聞き手に伝える話し手の意味には、上のような明示的な意味だけでなく、次のような、非明示的な意味である暗意 (implicature) も含まれる。

(3) C先生が書いた本を買うにはお金が足りなかったので、本を買ってくる
ことができなかった。

この暗意は、Bの発話を解釈する上で必ず復元しなくてはならない意味で、強い暗意 (strong implicature) と呼ばれる。この強い暗意に加えて、「C先生が書いた本を買うのに十分なお金を持って、また本を買いに行くつもりである」等の暗意も復元されるかもしれない。このような意味は、聞き手の責任において解釈されるもので、強い暗意に対して、弱い暗意 (weak implicature) と呼ばれている。

以上のように、文の意味では、暗意を扱うことはできない。また、明示的発話である明意 (explicature) に話を限定しても、文の意味には、不確定な要素が含まれているため、語用論のプロセスに頼らないと文の命題も復元することができないという問題点がある。したがって、多義的な語の一義化、直示的表現

の対象同定、「C先生が欠いた本を買うにはお金が足りない」の傍点部の内容を決定する手順などを含む、飽和（saturation）として大別される語用論のプロセスがなければ、真偽値の問える命題を復元するができないのである（以上すべての手順を飽和に含むかについては議論の分かれるところであるが、本稿では、今井（2009）にしたがっている）。さらに、以上のような、明意を復元する発展（development）のプロセスには、アドホック概念（ad hoc concept）構築が含まれ、発話解釈において重要な役割を演じている。アドホック概念構築を含む発展の作業はすべて、話し手の意図やコンテキストを考慮に入れた語用論の原理に基づいて行われるものである。

2. 語彙的縮小

前節では、文の意味は意味的に不完全なもので、飽和等の発展という作業を経て明意が復元されるということを確認した。多くの発話では、言語的に符号化された固定的な概念がそのまま伝達されるのではなく、語用論の原理に基づいて、アドホック概念が構築されるということについてもふれた。聞き手は、符号化された概念を出発点としてアドホック概念を構築するため、概念は限りなく作り出される可能性があり、必然的に語の数よりも概念の数の方が多くなるものと考えられる。

(4) 2点目として、私たちが持つ語の数と、私たちが持つ概念の数とは、どちらが多いのかという問題に答えを与えてくれます。古典的な経験主義者の見解によると、概念よりも語の方がずっと多く存在するとされています。つまり、概念の方は単純で分解不可能なものがごく少数あり、それらが組み合わせと再組み合わせを何度も繰り返していくうちに語が生まれるわけですから、語の数の方がはるかに多くなるということです。これとは対照的にフォーダーの見解では、概念とほぼ同じくらいの数の語が存在するとしています。つまり、形態的に単一と見られる語のほとんどの意味が、単一で分析できない概念であるという考えですから、語と概念はほぼ一対一の対応関係になる、という主張です。関連性理論では、フォーダーも、古典的な理論も、どちらも間違っていると考

えています。実際ほとんどの場合、語を解釈する際に新しいアドホック概念が作られ、使われているのですから、語よりもはるかに多くの概念が存在するということになります。

今井 (2009: 161-162)

今井 (2009) に示されている通り、古典的経験主義的見解や、フォーダーの見解とは異なり、その場限りの意味として、発話の度にアドホック概念が構築されるために、実際には、語の数をはるかに超える様々な概念が生み出されることになる。次の Moreno (2007: 47) の例をみれば明らかのように、fish や birds という語もコンテキストによって異なる意味に解釈される。

- (5) a. The fish attacked the swimmer.
b. The fish was nice but the potatoes were cold.
c. Please feed the fish in my room twice a day.
- (6) a. I like listening to the birds in the morning.
b. The birds flew above the waves.
c. She was feeding the birds in the square.

(5) では、サメのような魚、レストランで出される魚料理、金魚のようなペット等の意味でそれぞれ解釈されている。(6) では、コマドリやカナリアのような鳥、カモメなどの海鳥、鳩、といった意味でそれぞれ解釈されている。もちろん、たとえば (6a) のような例をみれば明らかのように、以上のような解釈も国や地域などコンテキストの影響によって意味が大いに異なったものとなる。これらの例ではすべて、伝達される概念は、符号化された概念よりも限定的な意味となっており、コンテキストと語用論的原理に基づいて語彙的縮小 (lexical narrowing) が行われていると言える。

関連性理論によると、まず発話によって聞き手の側に「相手の発話には注意を払うのに十分な関連性がある」という関連性の期待が生じることになる。聞き手は、この関連性の期待を満たすために、明意・コンテキストの想定・暗意

の相互調整を行いながら発話を解釈しようとする。つまり聞き手は、「最適の関連性の当然視」をし、「関連性理論による解釈の手順」にしたがって発話解釈を行うのである。

(7) 最適の関連性の当然視 (Presumption of optimal relevance)

- a. その発話は聞き手が少なくとも処理 (解釈) するに値するだけの関連性を持っている。
- b. その発話は、話し手の能力と選択が許す範囲内において最も高い関連性を持つ。

(8) 関連性理論による解釈の手順 (Relevance-theoretic comprehension procedure)

処理コストが最小になるような道をたどりながら認知効果を計算する。

- a. 解釈 (縮小やコンテキストや含意など) を接近可能な順序で吟味し、
- b. 予測された関連性のレベルまで達したら (または達しなかったら) 解釈を打ち切る。

今井 (2009: 168)

聞き手は、処理コストが最小になるような解釈を行い、相互調整を行いながら最もアクセスしやすい明意・コンテキスト的想定・暗意を求めるものと考えられる。このようなプロセスを経て、概念は関連性の期待が満たされるころまで縮小され、関連性の期待が満たされたところで語彙的縮小を含む発話解釈が終了することになる。

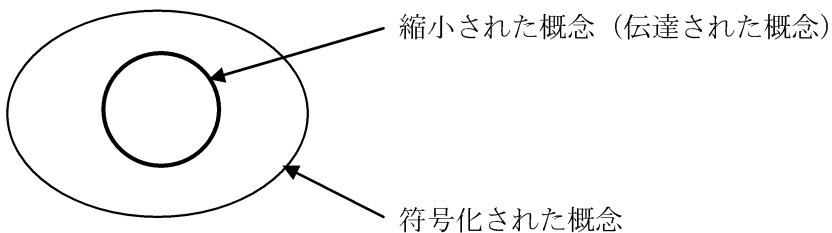
このプロセスについて、具体例を通して簡単に説明してみたい。たとえば、友人にジョギングにさそわれたというコンテキストで、次の文を話し手が発話したとする。

(9) I have a temperature.

temperature の符号化された意味からは、「平熱がある」という解釈も可能である。しかし、関連性理論に基づけばこのような解釈は生じない。まず、ジョギングに誘ったことに対する答えを期待している聞き手にとって、「平熱がある」という自明な解釈は自分の問いに対する返答にはなっていないので、関連性の期待を満たすことはなく、話し手の意味の候補にもなりえない。I have a temperature. を理由として、一緒にジョギングすることができないといった内容の暗意を予測しながら、相互調整を行い、最もアクセスしやすい「平熱よりも高い熱がある」ということを示すアドホック概念 temperature* へと聞き手は縮小を行い、「平熱よりも高い場合は、ジョギングなどの運動はできない」などのアクセスしやすいコンテクスト的想定を吟味すると考えられる。つまり、ジョギングへの断りの理由を考えながら最もアクセスしやすい順序で、明意・暗意・コンテクスト的想定を相互調整し、関連性の期待を満たすような解釈を求めるものと考えられる。この結果、「話し手は、平熱よりも高い熱がある」という明意と「平熱よりも高い熱があるので、話し手は友人と一緒に（発話の行われた当日に）ジョギングを行うことができない」という暗意を復元することになる。

以上のように、語彙的縮小では、関連性の期待が満たされるところまで符号化された概念を縮小するため、縮小化の結果構築されたアドホック概念は符号化された概念の部分集合となる。これを Carston (2002: 325) に修正を加えて、図示すると次のようになる。

(10)



3. 語彙的拡張

前節では、語彙的縮小についてみてきたが、アドホック概念には、もう1つの重要なプロセスがある。これが語彙的拡張 (lexical broadening) である。語彙的拡張では、符号化された概念の範囲を超えて拡張が行われるため、符号化された概念のカテゴリに収まらないような対象がアドホック概念の範囲に含まれるようになる。この語彙的拡張の例を Carston (2002: 328) から引用する。

- (11) a. There is a rectangle of lawn at the back.
b. This steak is raw.

これらの表現は、近似表現 (approximation) と呼ばれ、比較的厳密な意味を持つ語の概念を、符号化された概念の周辺部にまで広げたものである。たとえば (11a) では、厳密な長方形ではなく、長方形に近い形をしているという意味である。長方形以外にも、円や三角形などの幾何学的用語に対してよく使われる用法であると言える。また、時間などの数字についても同じことが当てはまる。たとえば、家から学校までの平均通学時間が1時間5分の場合に「家から学校まで1時間かかります」と言ったり、12時25分のときに「今12時半です」などと言うことがあるが、これらも近似表現の一種であり、聞き手は通常これらの発話を「偽」として認識することはない。この点について Wilson & Sperber は次のように述べている。

(12) They [loose uses] do not have the striking quality that Grice associated with floutings, which he saw as resulting in figurative or quasi-figurative interpretations. Loose talk involves no overt violation, real or apparent; or at least it does not involve a degree of overtness in real or apparent violation which might trigger the search for an implicature.

Wilson & Sperber (2000: 224)

Wilson & Sperber は、拡張的用法 (loose uses) について論じているが、近似表現は拡張的用法の一種であり、明示的違反を含まない表現なので、公理への違反についての議論は、近似表現に当てはまるものである。修辭的表現について Grice は、公理への違反を想定し、それを經由して含意が復元されると説明している。しかし、近似表現の場合、発話が偽であるということ、つまり字義性からの逸脱が認識されることはない。近似的表現について、字義性からの逸脱が認識されないとすると、Grice の修辭的表現に対する説明法は適用できないということになる。

これまで語彙的拡張の例として近似表現について考察してきたが、語彙的拡張は、近似表現以外に、伝統的に誇張法 (hyperbole) や隠喩 (metaphor) と呼ばれてきた用法についても適用される。

- (13) a. Robert is a bulldozer.
b. Sally is a block of ice.
c. That surgeon is a butcher.

Wilson & Carston (2006: 415)

- (14) That book puts me to sleep.

今井 (2009: 184)

伝統的修辭学に基づけば、(13) は隠喩の例と捉えることが可能である。それでは、(14) はどうであろうか。コンテキスト次第では、字義的発話・誇張法・隠喩のいずれともみなすことができる。修辭学では、誇張法と隠喩について、伝統的に異なる技法として区別してきたが、実際には (14) のようにいずれともとれるような例は少なくない。関連性理論では、字義的発話・近似表現・誇張法・隠喩は連続体を形成するものと捉えている。したがって、伝統的には独立した修辭的技法と考えられてきた隠喩や誇張法であるが、これらの用法に特有のメカニズムは存在しないと主張している。

- (15) Specific uses of metaphors by individual authors or in given literary

genres are indeed worthy of study, and so is the very idea of metaphor as a culturally salient notion with a long, rich history. Still, we see metaphors as simply a range of cases at one end of a continuum that includes literal, loose and hyperbolic interpretations. In our view, metaphorical interpretations are arrived at in exactly the same way as these other interpretations. There is no mechanism specific to metaphors, no interesting generalisation that applies only to them.

Sperber & Wilson (2006: 172)

さらに、今井 (2009) は、(14) That book puts me to sleep. という例文を通して、字義的発話・近似表現・誇張法・隠喩のそれぞれを明確に区別することはできないという点を指摘している。

(16) (4) (本稿の (14)) は、字義的表現・近似表現・誇張法・隠喩のいずれともとることができます。字義的表現ととれば、本当に眠ってしまうと解釈できますし、近似表現ととれば、眠ってしまうといっても差し支えないような状態になると解釈できます。誇張法と捉えれば、眠くなるのに近い状態で、近似表現と隠喩の間くらいに概念が拡張されていることとなります。また、隠喩と捉えれば、本当に眠くなるわけではありませんが、眠くなるのに類似した状態になると解釈できます。どこまでが字義的表現でどこからが近似表現なのか、どこまでが近似表現でどこからが誇張法なのか、そしてどこまでが誇張法でどこからが隠喩なのかということについて、何らかの理論上の根拠があれば別ですが、普通は、区別することができないのではないのでしょうか。

今井 (2009: 179)

以上のように、関連性理論では、字義的発話・近似表現・誇張法・隠喩のそれぞれを異なる特殊な用法とは捉えずに、すべてに対して同一の解釈上のプロセスが適用されると考えている。たとえば、近似表現では、アドホック概念 PUT TO SLEEP* へと概念が拡張され、誇張法では PUT TO SLEEP** に、さらに隠

喩では PUT TO SLEEP*** へと拡張されることになる。このように概念の拡張の度合いによって誇張法となったり、隠喩となったりすると捉えているため、誇張法と隠喩の間の区別がはっきりとしないような例が生じることは例外ではなく、極めて自然なことになるのである。概念の拡張化の結果生じるこのようなアドホック概念は、コンテキストと関連性の原理に基づいて、その場、その場で構築されるものであるため、発話ごとに意味が微妙に異なるという事実も説明することができる。

(17) a. 十月九日、鉄道博物館は、美術館になります。

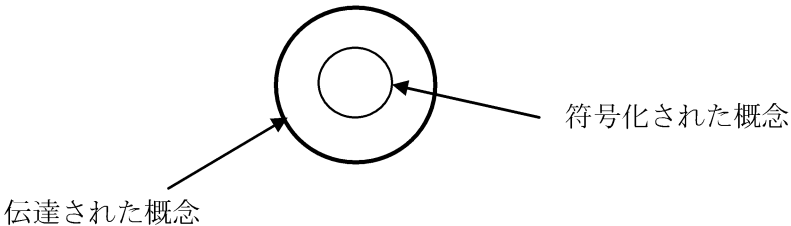
b. 「御料車」、それは走る美術館でした。(鉄道博物館広告)

この広告は、2010年10月9日から2011年1月16日までの特別企画展についてのもので、10月9日以前に一般に配布されたものである。この企画展では、御料車および100点以上の美術品が公開されるようで、「絵画、彫刻、工芸品などの美術品を展示する施設」という美術館の特徴を実際に備えていると言える。しかし、鉄道博物館全体にわたって美術品が展示される訳ではなく、一部の区画が企画展に充てられるものと予想されるので鉄道博物館自体が美術館になるとまでは言えないかもしれない。つまり、(17a)の「美術館」は、美術館の特徴を備えているため、字義的発話ともとれるが、企画展の区画等のことを考慮に入れると符号化された概念をわずかに拡張した近似表現とも、あるいは誇張法ともとれる。これに対して、(17b)では、明治・大正・昭和の時期に使用されていた御料車に言及している。つまり、鉄道博物館の企画展とは異なり、当時の御料車は、言うまでもなく、美術品の一般向けの展示が目的ではなく、乗り物としての使用が目的である。したがって、御料車は、絵画、彫刻、工芸品などの美術品を展示する一般に対して開かれた施設だった訳ではないため、御料車を美術館として使用していたとは言い難い。また、美術館自体が通常は移動することがないので、「走る美術館」をみると、走る列車を含むまで「美術館」の概念が拡張されているということが分かる。つまり、(17b)の「美術館」は、誇張法もしくは隠喩まで概念が拡張されていると考えられる。以上のことか

ら、(17a,b) の例では、同じ広告で連続して使用されている表現であるにもかかわらず、異なる概念として使用されていることが分かる。このように、アドホック概念は、コンテキストと関連性の原理にしたがって、その場、その場で構築されるものなので、発話の度に異なる概念が伝達されることがある。

これまでみてきたアドホック概念の拡張の様子を単純化して図示すると、次のようになる。

(18)



今井（2009: 176）

この図からも分かるように、語彙的縮小とは対照的に、符号化された概念のカテゴリの外側に伝達された概念が拡張されている。

以上の通り、これまでみてきた例では、1つの語に対して語彙的縮小か語彙的拡張のいずれかのみが行われているが、同一のプロセスが適用される語彙的縮小と語彙的拡張が、ある語に対して同時に生じるということはないのであろうか。この点については、次の節で詳しく検討したいと思う。

4. 語彙的縮小と語彙的拡張

前節でふれた語彙的縮小と語彙的拡張の共起の可能性についてであるが、アドホック概念が同一のプロセスで生じるという点とアドホック概念の多様性を考慮に入れると、むしろ共起する可能性が高いと考えた方が自然である。たとえば、コップに氷と底にわずかのジュースが残っている状態で次の発話が行われたとする。

(19) コップが空だ。

「空」という語は、厳密な意味では何もない状態を指すが、コップの底にわずかにジュースが残っている状態で、コップを「空」と呼んでも、通常「偽」であると認識されることはない。つまり、(19)は近似表現なのである。また一方で、氷がコップに残っているという状態も厳密には「空」と呼ぶことができないが、こちらは概念が拡張されているというよりも縮小されていると言える。つまり、コップの中の液体（ジュース）に概念が絞られていると考えられる。もしこのコップの中にストローが入っていたとしても、厳密にはコップが空とは呼べないかもしれないが、これも氷の場合と同様に、概念が縮小されコップの中の液体に絞られているため、ストローが入っていても「空」と認識されることになる。また、コップに残っている液体の量によっては、つまり液体の量が比較的多ければ、近似表現ではなく、誇張表現となる可能性が高い。以上のように、(19)では、概念の縮小が行われて、コップの中の液体に焦点が絞られる一方、ジュースが少し残っている状態を含むまで、つまりこの状態を「空」と呼べるまで概念の拡張が行われているのである。語彙的縮小と語彙的拡張の両方が行われてアドホック概念が構築されるという点について、Wilson & Carstonも次のように述べている。

(20) As Carston (1997, 2002a) has shown, narrowing and broadening often combine to yield an adjusted concept that is narrower than the encoded concept in some respects, and broader in others. In (4b) above, for instance ('Buying a house is easy if you've got money'), 'money' might be narrowed, on the one hand, to exclude amounts of money that would be manifestly inadequate in the circumstances, but also broadened to cover not only actual money holdings, but also possessions such as land and art works with a suitable money value.

Wilson & Carston (2006: 411)

つまり *Buying a house is easy if you've got money.* という例文中の *money* に対して、語彙的縮小が行われることによって、家を購入するのに見合った金額のお金に概念が絞られ、それ以外のは排除されている。また、同時に語彙的拡張によって相応の価値を有する不動産や芸術品なども含むまで概念が拡張されているのである。There is a rectangle of lawn at the back. という例文について、Carston も語彙的縮小と語彙的拡張が同時に発生する可能性がある点を、以下の通り指摘している。

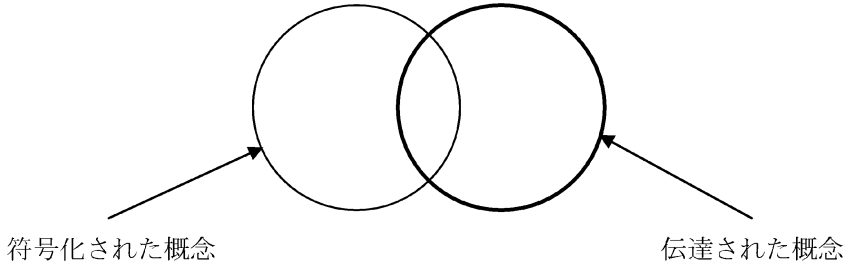
(21) The encoded concept RECTANGLE is loosely used in (24a) [There is a rectangle of lawn at the back.], since the lawn in question might have all sorts of little irregularities that render it not strictly rectangular (i.e. not having four right angles). If the denotation of the RECTANGLE* includes all strict rectangles along with other shapes that deviate to some limited degree from strict rectangularity, then the relation between RECTANGLE and RECTANGLE* is captured by the diagram in (22). However, the denotation of the ad hoc concept might include some cases of strict rectangles while excluding others; it might, for instance, exclude those with two sides a mile long and the other two only a few inches long, the relevant concept here being one that can apply to lawns.

Carston (2002a: 344)

つまり、ここで芝生に適用されている「長方形」という概念には、厳密な意味での長方形も含まれるが、語彙的縮小により、長方形の定義を満たすものでも、たとえば向かい合った2辺が1マイルで、他方の2辺が数インチという長方形は排除されるということである。また、語彙的拡張の結果、厳密には長方形の定義を満たしていない形も含まれることになるのである。もし実際に語彙的縮小と語彙的拡張の両方が同時に行われるのであれば、(18) (引用文中の (22) は、本稿の (18) の図とほぼ同じものである) よりむしろ (22) のように図示することができると Carston (2002a: 344) は主張している。Carston (2002a:

343) の図に修正を加えて示すと、以下のようになる。

(22)



以上の通り、語彙的拡張には、まず (18) のように符号化された概念の外延とアドホック概念の外延との間に真部分集合の関係が成り立つものがある。また、語彙的拡張と同時に語彙的縮小も行われる (22) のような場合もあると言える。さらに Carston は、次のようなもう 1 つの場合を挙げている。

(23) Robert is a bulldozer.

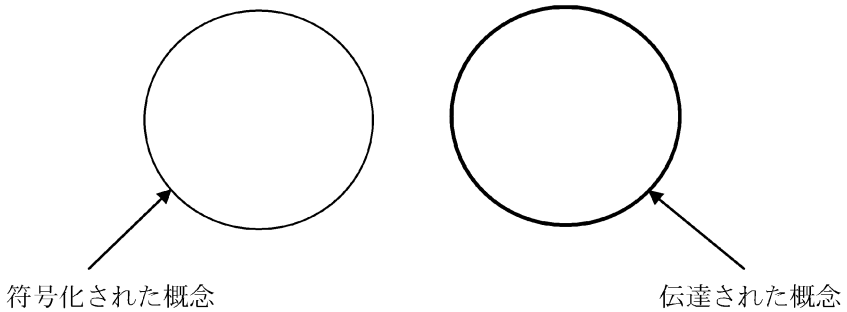
(24) Sally is a block of ice.

Carston (2002a: 350-1)

以上の例では、それぞれ「ロバートは強引で、頑固だ」、「サリーは、無口で感情を外に表さない」などのコンテクスト的含意 (contextual implications) が得られる。しかし、人間に対する特性を含まない bulldozer や block of ice の百科事典的知識 (encyclopaedic knowledge) から、このような意味を直接得ることはできないと考えられる。前掲の *Buying a house is easy if you've got money.* の *money* では、拡張された概念は、金銭に関わるものに限られており、同一カテゴリ内での拡張となっている。しかし、(23) や (24) では、ブルドーザーや氷の概念が人間を含むまで拡張されている。したがって、bulldozer や block of ice の拡張は、少なくとも同一カテゴリ内での拡張ほど直接的なものではない。

もし「ロバートは強引で、頑固だ」、「サリーは、無口で感情を外に表さない」などのコンテクスト的含意が百科事典的知識から直接的に得られないのであれば、Carston (2002a: 354) が指摘するように、符号化された概念とアドホック概念の関係は互いに素な集合 (disjoint sets) になるかもしれない。Carston (2002a: 353) の図に修正を加えて、両者の関係を以下に示す。

(25)



このように互いに素な集合となるという点について、Carston は次のように説明している。

(26) Consider again BULLDOZER and BULLDOZER*. The logical entry for the lexicalized concept BULLDOZER may contain an inference rule with the output HEAVY MACHINERY OF A CERTAIN SORT, or something along those lines, and its encyclopaedic entry includes information about its land-clearing function, its effectiveness in mechanically pushing away large volumes of earth, rocks and other debris, and about its physical appearance, perhaps represented by a visual image of some sort. The components of the ad hoc concept BULLDOZER* include representations of the properties mentioned earlier: obstinacy and persistence, insensitivity to other people's feelings and views, single-mindedness in pursuing personal interests, etc. It's not clear to me

whether a one-off ad hoc concept is usefully thought of as having a logical entry, but for those people for whom BULLDOZER* has become a stable element of their conceptual systems, the likely logical entry is HUMAN TEMPERAMENT OF A CERTAIN SORT (this is certainly reflected in the many dictionaries that give a second sense to the word 'bulldozer'). The entities in the world that fall under these two concepts comprise disjoint sets.

Carston (2002a: 354)

しかしながら、この問題については、Wilson & Carston (2006) に基づいて再検討してみる必要がある。たとえば、(24) Sally is a block of ice. が、次のようなコンテキストで発話されたとする。

- (27) a. I had dinner with Sally last night.
b. She's a block of ice.

Wilson & Carston (2006: 425)

この発話によって、まず 'FROZEN WATER OF A CERTAIN FORM' という論理的素性と以下の百科事典的想定を持つ、符号化された概念 'BLOCK OF ICE' が活性化される。

- (28) BLOCK OF ICE: Encyclopaedic assumptions
a. SQUARE, SOLID, HARD, COLD, RIGID, INFLEXIBLE, etc.;
b. DIFFICULT/UNPLEASANT TO TOUCH, COME CLOSE TO, INTERACT WITH, etc.;
c. MAKES THE SURROUNDING ATMOSPHERE UNCOMFORTABLE, etc.;
d. MAKES PEOPLE WANT TO MOVE AWAY, etc.

Wilson & Carston (2006: 425)

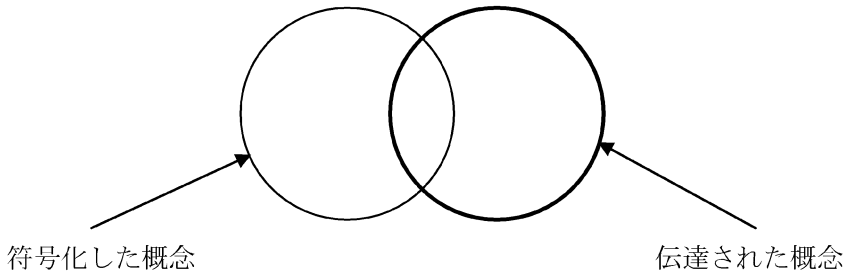
次に HARD, COLD, RIGID のような基本的な物理的概念の拡張が行われ、物理的概念と人間にも当てはまる心理的概念の両方を含んだアドホック概念 HARD*, COLD*, RIGID* が構築される。つまり、次のようなプロセスで推論が行われ、アドホック概念が構築されるのである。

- (29) 符号化された概念 BCLOCK OF ICE → 基本的な物理的概念 HARD, COLD, RIGID → 拡張された上位概念 HARD*, COLD*, RIGID*

相互調整のプロセスを通して、話し手が断定する明意 Sally is a block of ICE* と、サリーは HARD*, COLD*, RIGID* であり、冷淡で、付き合いにくい相手なので、サリーとの食事を楽しめなかったという暗意を聞き手は復元することになる。この解釈のプロセスは、(23) Robert is a bulldozer. にも適用される。つまり、符号化された概念 BULLDOZER → 基本的な物理的概念 POWERFUL など → 拡張化された上位概念 POWERFUL* など、の順で推論が行われるのである。こうして構築された POWERFUL* を含むアドホック概念は、上の HARD*, COLD*, RIGID* などの概念と同様に、物理的な意味と人間にも当てはまる心理的な意味の両方を持った概念となる。

以上のように、BULLDOZER や ICE は、人間とは異なるカテゴリに属するものであり、百科事典的想定である POWERFUL や COLD なども物理的な意味しか持たず、人間に当てはまるような心理的意味を持ってはいない。したがって BULLDOZER や ICE は、人間に対して用いられるアドホック概念 BULLDOZER* や ICE* とは、一見「互いに素な集合」を形成するように思われる。しかし、百科事典的想定 POWERFUL や COLD を拡張し、アドホック概念 POWERFUL* や COLD* を構築することによって、人間にも当てはまる概念にまで拡張を行うのである。したがって、アドホック概念 BULLDOZER* や ICE* は、百科事典的想定として (物理的意味と心理的意味の両方を持つ) アドホック概念 POWERFUL* や COLD* などを含んでいるため、符号化された概念 BULLDOZER や ICE との関係も、以下に 再録する (30) のようになると考えられる。

(30)



5. おわりに

文のレベルで、個々の語と文法によって決定される「文の意味」と話し手の意図が関係する「話し手の意味」とが異なるように、語のレベルでも、語自体の意味である符号化された概念と話し手が伝達しようとする語の概念は異なっている。つまり、多義的な語の一義化、直示的表現の対象同定、「足りない」の「何が(足りない)」という内容を決定するプロセスを含む、飽和という語用論の手順を通して、聞き手は語の概念を発展させてゆく。この発展のプロセスにおいて、アドホック概念の構築もきわめて重要な役割を担っていると言える。

アドホック概念構築には、「熱がある」の「熱」の意味を「平熱より高い熱」まで限定する語彙的縮小というプロセスがある。また、数字や幾何学的概念など、厳密な意味を持つ語の概念を広げて用いる近似表現や概念の幅をさらに広げる誇張法や隠喩などの語彙的拡張というプロセスがある。さらにこれら2つのプロセスは、それぞれが単独で生じるだけでなく、「コップが空だ」を通して分析したように、語彙的縮小と語彙的拡張の両方が同時に生じる場合もある。また最後に、語彙的拡張の例として、Sally is a block of ice. のように、Sally のカテゴリと a block of ice のカテゴリが異なる隠喩の例を考察した。一見、a block of ice の素性は、人間である Sally には当てはまらないように思われるが、アドホック概念 HARD*, COLD* などを通して、人間にも通用する ICE* というアドホック概念が構築されるのである。つまり、語彙的縮小から、近似表現・誇張

法・隠喩などを含むすべての語彙的拡張に至るまで、アドホック概念が同一のプロセスを通して構築されるのである。そして、これらの概念の構築は、すべて関連性の原理に基づいて行われることになる。

本稿を締めくくるにあたって、最後に岡田（2007）で取り上げた例について、多少の修正を加えた上で、再びここで検討することにしたい。

(31) We've run out of Kleenex.

(31) は店員の発話で、Kleenex を含むその店で扱っているすべての種類のティッシュを指しながら、「ティッシュはすべて売り切れた」と言っているとする。伝統的修辞学では、この用法を Kleenex という代表的な部分でクリネックス社の製品を含むその店で扱っているすべてのティッシュ製品という全体を指す換喩とみなすのではないかと思われる。しかしながら、関連性の立場からこの用法を捉えると、岡田（2007）でも指摘したように、これはアドホック概念の例となる。つまり、クリネックス社の製品のみに限定されるべき符号化された概念 KLEENEX が複数のメーカーのティッシュを含むまで拡張されて、アドホック概念 KLEENEX* が構築されているのである。この換喩の例では、近似表現、誇張法、隠喩と同様の手順で、アドホック概念が構築されており、同じプロセスを通して解釈が行われていると考えられる。つまり、隠喩などの場合と同様に、修辞学上の区分が換喩解釈上のプロセスに、何ら影響を与えていないということが分かる。つまり、(31) を換喩と捉えうるという点は事実であるが、換喩としての修辞学上の区分とその認識の問題とは無関係に、KLEENEX という概念が聞き手の側で理解されているということである。Sperber & Wilson が主張するように、隠喩や誇張法などには、発話解釈上の特殊なメカニズムが存在しないと考えられるが、隠喩や誇張法に加えて、(31) のような、(伝統的修辞学の中心的技法の1つである) 換喩の例も、アドホック概念として捉えなおすことができる。

(32) Metaphorical interpretations are arrived at in exactly the same way as

literal, loose and hyperbolic interpretations: there is no mechanism specific to metaphors, and no interesting generalisation that applies only to them.

Sperber & Wilson (2006: 171)

換喩に関しては、さらに詳しい分析が必要であるが、隠喩を含む伝統的修辞学の中心的技法を横断的に、アドホック概念構築という同一のプロセスが適用されて発話解釈が行われていると言える。隠喩や誇張法、さらには上の換喩の例を含め、個々の修辞技法に対して、特別な解釈は行われていないのである。つまり、これらの発話について言えることは、修辞学上の区分とは無関係に、同一のメカニズムを通してアドホック概念が構築されているということである。

(附記)

本稿は、外国語教育研究センター 2009 年度研究プロジェクトにおける研究成果の一部である。

参考文献

- Carston, R. (1997) 'Enrichment and loosening: complementary processes in deriving the proposition expressed?'. *Linguistische Berichte* 8, 104-127.
- Carston, R. (2002a) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. (2002b) 'Linguistic meaning, communicated meaning and cognitive pragmatics'. *Mind & Language* 17, 127-48.
- Grice, P. (1991) 'Logic and conversation'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. 305-315. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, Dan & Wilson, Deirdre. (2006) 'A deflationary account of metaphor'. *UCL Working Papers in Linguistics* 18. 171-203.
- Wilson, D. and R. Carston. (2006) 'Metaphor, Relevance and the 'Emergent Property' issue'. *Mind and Language* 21 (3): 404-433.

Wilson, D. and D. Sperber. (2000) 'Truthfulness and relevance'. *UCL Working Papers in Linguistics* 12. 215-257.

今井邦彦（編）（2009）「意味論」『言語学の領域（Ⅱ）』朝倉書店.

今井邦彦（編）井門 亮・岡田 聡宏・松崎 由貴・古牧 久典・新井 恭子（訳）
（2009）『最新語用論入門 12 章』大修館書店.

Ad hoc concepts: lexical narrowing and lexical broadening

Toshihiro Okada

The linguistically encoded concept of a word is not the same as the one communicated by the speaker, but only a clue to the communicated concept. The encoded concept needs to go through the process of *developing* including *saturation* and *ad hoc concept* construction. The ad hoc concept expressed by use of the italicised word below, for instance, is more specific than the encoded one, and therefore has a narrower denotation:

I have a *temperature*.

The speaker of this sentence might be understood as asserting not that she has a normal temperature or any temperature at all, but that she has a temperature above normal. The word *temperature* is used in a more specific sense than the encoded one, and this is an example of *lexical narrowing*. The ad hoc concept communicated by the speaker, on the other hand, may be more general than the encoded concept, as in the examples below:

The glass is *empty*. (referring to the nearly empty glass) [approximation]
Sally is a *block of ice*. [metaphor]

These are examples of lexical broadening, where a word is used to convey a more general sense than the encoded one, resulting in wider denotation. Lexical narrowing and lexical broadening are two similar processes based on the same

pragmatic principle, and they may cooccur, as Wilson & Carston (2006: 411) claim that ‘narrowing and broadening often combine to yield an adjusted concept that is narrower than the encoded concept in some respects, and broader in others.’ Approximation, hyperbole, and metaphor may all be seen as varieties of lexical broadening (or both lexical broadening and narrowing), and they are all interpreted in the same way through the relevance-guided *mutual adjustment* process.